

「熊谷守一 生きるよろこび」展を観る

2018年2月26日 虎長

東京国立近代美術館で3月21日まで開催中の展示会を2月23日に観てきた。

熊谷守一(くまがい もりかず)というと、厚塗りで単純化されたかたちと、一画面の色の数が少ない、明快で日本画的あるいは切り紙的な、猫・蝶・花・鳥の明るい絵を思い浮かべる(Fig 1,2,3)。

けれども 今回の「回顧展」を観て、先入観を多少修正しなければ、と感じた。

展示会は「第1章 闇の守一 1900-1910年代」「第2章 守一を探す守一 1920-1950」「第3章 守一になった守一 1950-1970」と分類されているが、僕が今まで知っていたのは「守一になった守一」の時代のものだったと知った。「生きるよろこび」との展示会名は、75歳以降の自宅の周りの動植物を描いていた頃の平穏な生活にはふさわしいが、その前史がある、という訳だ。



【Fig 1 鬼百合に揚羽蝶
1959 装飾的ですね
1960 作の同じ絵あり】

【Fig 2. 猫 1965
ご存じ典型的な守一調】

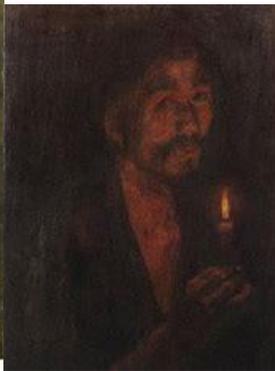
【Fig.3 雨滴 1961
白い水滴が動いているよう】

青木繁と美術学校で同級だった頃の絵は暗い。(Fig 4, 5) 闇の中でのものの見え方を追求したという。戦後の絵は明るいが、この変化に関して、守一自身「影のない色を重ねると明るくなる」と語っているそうだ。油彩画の製作は、光の変わる昼間はスケッチだけしておいて、夜は光が変わらないアトリエで行ったというので、今回の、数ある展示室の一つは暗く、照明が控え目になっていた。守一は光学、色彩学に強い興味を持っていた点は、ゲーテを思わせる。



[Fig 4 轢死 1908

女性の轢死体。経年変化もあり真っ暗]



[Fig 5 蠟燭 1909

自画像かな？]

第 2 章の時期は、裸婦(Fig 6)と風景画が多いが、いずれもくっきりした輪郭線と色の面による作風で、第 3 章の時期の画風のもとになっている。外出しなくなった第 3 章の時期の風景画は、第 2 期の時期のスケッチをもとに自宅で描いたという。(Fig 7)。第 2 章の時期には、子供を 3 人も亡くす悲劇にも直面している(Fig 8, 9, 10)。



[Fig 6 人物 1928

絵具厚塗り 補色による光と影]



[Fig 7 雨乞だな 1961 昔のスケッチをもとにしたもの。

切り紙みたい]

書と日本画(水墨画のみ)の展示は少なかった。ほとんどは油彩画で、初期のものはキャンバスに、その後の大部分は板に描いたものである。このことも今回初めて知った。また同首題の絵を大きさや色調を変えて沢山描いている。守一は「同じものを描いていると、よいものが生まれる」とも述べている由。



【Fig 8 ヤキバノカエリ
1956 (往時の息子の死を
後から描いた 人物の単純化)】

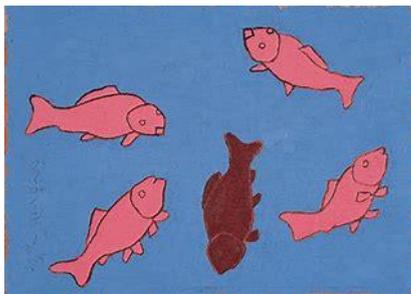


【Fig 9 陽の死んだ日 1928
次男 陽は 1928 に亡くなる)】



【Fig 10 萬の像 1950
長女 萬の死の床(1947)
スケッチを縦にして描きなおし】

アンリ・マティスなど外国の画家の絵(参考)と守一の絵とを並べて影響を示した展示は興味を引いた。(Fig 11, 12)



【Fig 11 稚魚 1958
5匹の魚のようにも、1匹の移動を
描いたようにも見える】



【Fig 12 アンリ・マティス 「ダンス」
左の「稚魚」に影響を与えたという】

なお、第 3 章の時期を描いた、沖田修一監督による映画「モリのいる場所」が 2018 年 5 月に封切られるとのこと。



【山崎努主演、樹木希林が妻役】



これが本物の「モリ」

以上